

## イカナゴに似た謎の魚「アカナゴ」とは？

海洋生産技術担当 和田隆史

Key word ; *Embolichthys mitsukurii*, アカナゴ, イカナゴ, タイワンイカナゴ, バッチ網, 底定置, 椿泊

### 謎の魚「アカナゴ」

阿南市 椿泊地区にある阿南漁協所属バッチ網漁業者の漁獲日誌を確認していたところ、平成 22 年 5 月 6 日及び 8 日のメモ欄に、「アカナゴ多い」との記入がありました。この時は椿泊地区でもよく漁獲されるイカナゴの事だと思い、気にも留めませんでした。しかしその年の夏頃、漁業者との話の中で、アカナゴという魚がイカナゴとは別に存在していることを知りました。その漁師さんは、「アカナゴはイカナゴに良く似た魚で、昔からバッチ網漁業者の間では知られている。イカナゴより赤っぽく見えるためアカナゴと呼んでおり、主に太平洋側のいわゆる灘区域で春に獲れる。イカナゴそっくりだが、多くは全長 15~20cm と、この辺りで獲れるイカナゴより大きいものがほとんどである。皮が硬く、イカナゴの親(いわゆるフルセ)とは違う。食用にはならないと思うし、網に入っても捨てている。」と話されていました。

灘区域では底定置(海底に仕掛ける小型定置網)が盛んです。確認すると、アカナゴは底定置でも漁獲されるとの話でした。漁業者の話では、「3~5 月の春先にしか獲れず、魚獲り部のつば網付近の 12 節の網目に良く刺さっている。アカナゴはイカナゴの仲間には違いないが、イカナゴとは違う。」とのことでした。

そこで、椿泊地区のバッチ網や底定置漁業者に、「アカナゴが何の魚か調べたいので、獲れたら是非持って帰ってきて欲しい。」と依頼しました。

### 「アカナゴ」を調べる

とりあえず図鑑やインターネットでアカナゴを調べてみました。すると、シワイカナゴという魚が北海道の一部でアカナゴと呼ばれていることが分かりました<sup>1,2)</sup>。シワイカナゴは名前のおりイカナゴに似ていますが、イカナゴの仲間ではなく、トゲウオ目シワイカナゴ科に属する魚です<sup>3)</sup>。相模湾以北と日本海の本州沿岸及び北海道に生息することなので、本県沿岸に生息する可能性は非常に低いと言えます。そのほかの魚でアカナゴと呼ばれている魚は全く見あたりませんでした。それではアカナゴは何の種類なのでしょう。イカナゴの仲間の別の種類か、それとも全く別種の魚か、それとも漁業者が否定していたイカナゴの親なのでしょう。

### ついに入手！

平成 23 年 4 月 26 日、漁業者から「アカナゴが 3 匹獲れた。」と連絡を受けました。獲れたのは、阿南市と海部郡の境付近の水深 25m 付近の海底に設置した底定置だそうです(図 1, 2)。その日は受け取れなかったため、冷凍保存した標本を 5 月 2 日に受け取り、早速検索図鑑で調べてみました。受け取ったアカナゴは、イカナゴに似ていますが確かに全体が赤っぽく、明らかにイカナゴの親ではありませんでした。

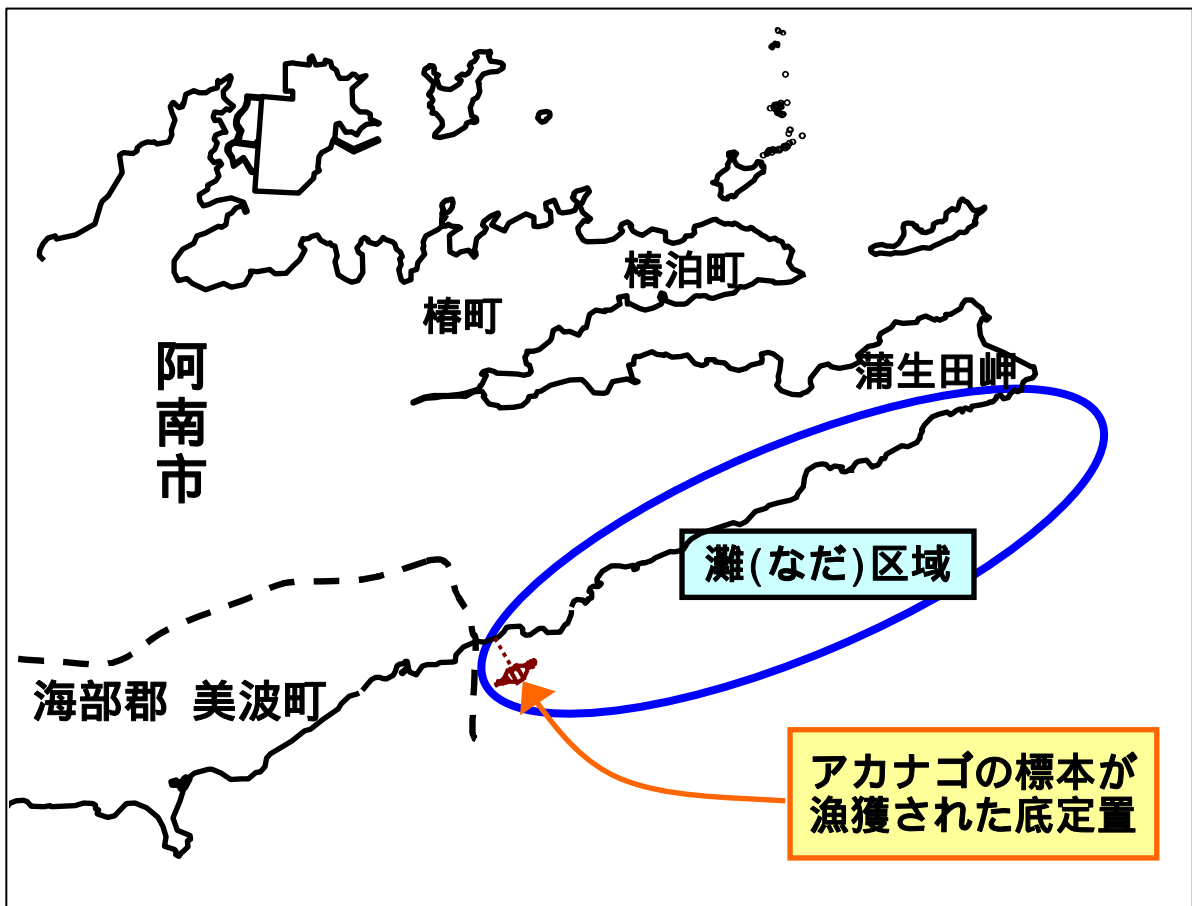


図 1. 灘区域とアカナゴが漁獲された底定置の位置

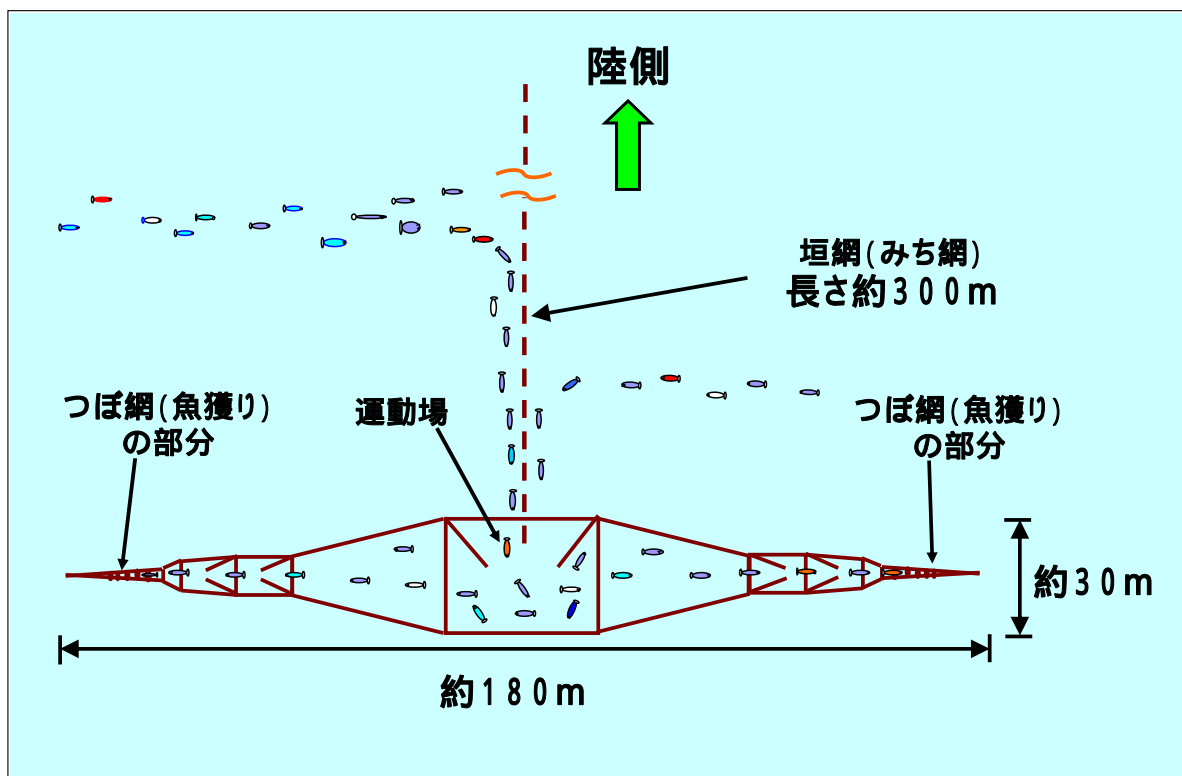


図 2. 底定置の模式図。水深 20m 前後の海底に設置される。

## 「アカナゴ」の種類判明

日本にはイカナゴのほか、キタイカナゴ、ミナミイカナゴ及びタイワンイカナゴの4種のイカナゴ類が生息しています<sup>3~8)</sup>。このうち、キタイカナゴは北海道北部に、ミナミイカナゴは小笠原諸島にのみ生息しています。本県沿岸に生息しているイカナゴ類は、瀬戸内海周辺に広く分布するイカナゴのほかは、相模湾から南シナ海に分布するとされるタイワンイカナゴだけです。

受け取った3匹のアカナゴを解凍し、検索図鑑で調べた結果、スズキ目イカナゴ科タイワンイカナゴ属のタイワンイカナゴと同定されました<sup>3)</sup>。タイワンイカナゴの決定的な特徴として、日本に生息するイカナゴ類で唯一<sup>はらびれ</sup>腹鰭があり、腹鰭の有り無しでイカナゴと簡単に見分けがつかうことが分かりました。タイワンイカナゴはイカナゴに比べ、<sup>したあご</sup>下顎の<sup>くちびる</sup>唇が厚いことも特徴のようです(写真1~3)。タイワンイカナゴは高知県ではキスゴと呼ばれ<sup>1)</sup>、確かにシロギスに似ています。



写真1. 平成23年4月26日に灘区域に設置された底定置で漁獲された全長136mm, 尾叉長127mm, 体重10.6gのタイワンイカナゴ(椿泊漁協所属太居雅敏氏提供)



写真2. 平成23年5月20日に牟岐漁港近くの漁場で操業したバッチ網で漁獲された全長102mm, 尾叉長98mm, 体重5.1gのイカナゴ(牟岐町漁協<sup>にさば</sup>荷捌き場に水揚げされたもの)



写真 3. タイワンイカナゴ(左)とイカナゴ(右)の腹側の写真。タイワンイカナゴには特徴である腹鰭が確認できる。

### タイワンイカナゴの測定

タイワンイカナゴの測定結果は次のとおりでした(表 1)。生殖腺は全ての個体で確認され、3 匹のうち 2 匹がオス、1 匹がメスで、特にメスは卵巣が比較的発達していました。また、全個体の腹腔内に脂肪を確認しました。

表 1. タイワンイカナゴの測定結果

番号	全長(mm)	尾叉長(mm)	体重(g)	雌雄	生殖腺重量(g)
136	127	10.6	メス	0.21	
153	142	13.7	オス	0.12	
144	134	13.2	オス	0.05	

### タイワンイカナゴの味は？

タイワンイカナゴを知る漁業者数名に確認したところ、「硬くて不味そうなので、食べる気がしない。」と話されていました。調べたところ、台湾魚類資料庫という HP のタイワンイカナゴ欄に、「食用可」という内容の表記を見つけました<sup>9)</sup>。そこで、職場にいた職員 2 名と共に、イカナゴの調理法で最も一般的な釜揚げと、刺身で食べてみることにしました。

釜揚げにしたタイワンイカナゴは、イカナゴと見た目が全く違いました。タイワンイカナゴは鱗がびっしり体表を覆って皮が硬く、イカナゴのように頭から丸ごと食べる気がしません。身だけを食べましたが、綺麗な白身で脂もほどよくのっており、イカナゴとは味が違うが、意外にもかなり美味しい部類の味だと 3 人の意見が一致しました。また、刺身は魚体が小さいためほとんど身がとれませんが、キスやメバルに似た色合いで、脂ののりは上品で味も良く、釜揚げ同様かなり美味しいものでした(写真 4)。



写真 4. タイワンイカナゴ 2 匹分の刺身

### 県内におけるタイワンイカナゴの分布

タイワンイカナゴは相模湾以南の太平洋側に広く分布し、岩礁地帯の水深 20～30m 前後の砂地の浅海底に数 10 匹の群れで生息し、伊豆海洋公園では周年観察されています<sup>3~8)</sup>。本県では阿南市の太平洋沿岸に分布することを確認しましたが、高知県境の海陽町穴喰地区でも、漁協の職員さんが 1 回だけ定置網の混獲物で見たことがあるそうです。これらのことから、本県太平洋沿岸一体に広く生息していると思われます。

また、タイワンイカナゴの稚魚<sup>ちぎょ</sup>は、チリメンの混獲物(いわゆるチリモン)を取り上げた図書に紹介されているほか<sup>10)</sup>、紀伊水道の和歌山県海域や大阪湾で主に秋に漁獲されたチリメンにも、たまに混じっているそうです(きしわだ自然資料館風間氏私信)。そこで、平成 22 年 10 月頃に和田島漁協所属漁業者が紀伊水道で漁獲したチリメンの混獲物を確認したところ、タイワンイカナゴと思われる稚魚が見つかりました(写真 5)。このことから、タイワンイカナゴの稚魚は紀伊水道側にも広く分布しているかもしれません。



写真 5. 平成 22 年 10 月頃に紀伊水道で漁獲されたカタクチイワシシラスのチリメンに混じっていたタイワンイカナゴと思われる稚魚(上)と、平成 23 年 4 月に紀伊水道で漁獲されたイカナゴのチリメン(下)

## タイワンイカナゴの名前の由来

タイワンイカナゴは学名を *Embolichthys mitsukurii* (Jordan et Evermann, 1902) といいます。種名に *mitsukurii* とありますが、これは明治期に活躍した動物学者、箕作佳吉博士<sup>みつくりかきち</sup>のことであり、記載者の1人である Jordan 氏<sup>きさいししや</sup>が、台湾で採集されたタイワンイカナゴを新種として記載するとき、親交のあった箕作博士<sup>けんめい</sup>に対して献名したものと分かりました<sup>11)</sup>。日本産の動物の標準和名や学名に箕作博士の名前が付けられているものは数多く、有名なミツクリザメのほか、平成10年9月10日に阿南市伊島<sup>いしま</sup>沖で本県漁業者の釣針に掛かって採集されたミツクリウロコムシもその1つです<sup>12,13)</sup>。さらに調べてみると、記載者の Jordan 氏は、アメリカのスタンフォード大学の初代学長をつとめた魚類学者であり、最近話題になったクニマスをはじめとして、日本に産する多くの魚類の記載に関わった人物だと知りました。

## おわりに

タイワンイカナゴは本県でも広く分布していると考えられますが、小型で水産上の価値が乏しく人目につきにくい<sup>ため</sup>、これまで現職及び歴代の水研職員の誰にも知られていない存在でした。

水研だよりでは、これまでミナミクルマエビ、リュウキュウヨロイアジ、タイワンアイノコイワシ等々南方系の珍しい魚介類が徳島県海域で漁獲されたことを紹介してきました<sup>14,15)</sup>。タイワンイカナゴもその名が示すとおり、基本的に南方系の魚です。稚魚は紀伊水道を含め比較的広く分布するものの、成魚は今回紹介したように本県においては太平洋側に分布が限られているようです。また、比較的生息量が少なく目につきにくい魚です。このようなことから、今後水温の上昇により分布域が拡大する可能性があります。このような視点から、タイワンイカナゴは高水温化傾向の指標となる<sup>かたわ</sup>かもしれず、業務の傍ら今後の動向に注目したいと思っています。

最後に、タイワンイカナゴをご提供いただいた椿泊漁協所属太居雅敏氏<sup>たいいまさとし</sup>、イカナゴをご提供いただいた牟岐町漁協の漁業者の方々、タイワンイカナゴの学名についてご教示いただいた大阪市立自然史博物館の波戸岡清峰氏<sup>はとおかきよたか</sup>、タイワンイカナゴのチリモンについてご教示いただいたきしわだ自然資料館の風間美穂氏及びアカナゴ情報をいただいた漁業者の方々に深謝します。

## 参考文献

- 1) 日本魚類学会編．日本産魚名大辞典，株式会社三省堂，東京，1981，180p(シワイカナゴ)，199p(タイワンイカナゴ)．
- 2) 高木正人．全日本及び周辺海域に於ける魚の地方名，高木正人，佐賀，1970，6p．
- 3) 波戸岡清峰．イカナゴ科．日本産魚類検索 全種の同定 第二版(中坊徹次編)，東海大学出版会，東京，2000，1074p．
- 4) 阿部宗明，落合明．原色魚類検索図鑑，株式会社北隆館，東京，1989．
- 5) 反田實．わが国の水産業「いかなご」，社団法人日本水産資源保護協会，東京，2006，4-6．
- 6) 益田一，尼岡邦夫，荒賀忠一，上野輝彌，吉野哲夫．日本産魚類大図鑑，東海大学出版会，東京，1984．
- 7) 井田齋．イカナゴ科．山溪カラー名鑑 日本の海水魚(岡村収，尼岡邦夫編)，株式会社山と溪谷社，東京，1997，556p．
- 8) 益田一．山溪フィールドブックス 海水魚，株式会社山と溪谷社，東京，1992，267p．
- 9) 台湾魚類資料庫 HP *Bleekeria mitsukurii* <http://fishdb.sinica.edu.tw/chi/species.php?id=&gen=&spe=&science=Bleekeria%20mitsukurii>
- 10) きしわだ自然資料館ほか監修．チリモンモンスターをさがせ！，偕成社，東京，2009．
- 11) 玉木存．動物学者箕作佳吉とその時代 - 明治人は何を考えたか，株式会社三一書房，東京，1998．

- 12) 岡崎孝博 . タチウオ釣に掛かった不思議な生物 . 徳島水試だより 34 号 , 1998 , 1-2 .
- 13) 西栄二郎 , 岡崎孝博 , 田辺力 . 徳島県沖から採集されたミツクリウロコムシ *Eupolyodontes gulo* (GRUBE) のものと思われる巨大な吻 . 南紀生物 41(1) , 和歌山 , 1999 , 57-60 .
- 14) 池脇義弘 . 南からやってきたクルマエビのそっくりさん . 徳島水試だより 40 号 , 徳島 , 2000 , 8p .
- 15) 上田幸男 , 守岡佐保 . 南方系魚類リュウキュウヨロイアジと台湾アイノコイワシの来遊 . 徳島水研だより 60 号 , 徳島 , 2006 , 10-11 .